

教科主張

図画工作科の本質

子どもはこれまでの経験から、一人ひとり、自分にとっての表現の意味や価値をもち合わせている。ここでいう経験とは、その子の中で培われてきたものやそこに至るまでの過程であり、表現とは“自分のおもいを表したい”“何かを伝えたい”というおもいをもち、動き出すことと考えている。題材の中で、様々な対象と出合った子どもは対話や鑑賞によって他者の表現にふれ、自己と他者の間で、表現を響かせ合い、自分のおもいや表現する過程を見つめ直したり、表現するための方法を選択したりしていきながら、自分なりの表現の意味や価値を見出していく。私たちはこのようなプロセスを、図画工作科における本質と考えている。子どもがこのプロセスをつなげていくことで、自身のもち合わせている色や形などの造形的な視点を磨き、見える世界を広げ、人生を彩り豊かにしていくと考えている。

図画工作科の考える『その子らしく学ぶ』とは ～人間性の涵養につながる経験～

授業の中で、子どもは対象と結びつくと“いいこと思いついた。やってみよう！”“こうしたらどうなるかな”“こんなものを表したい”などというおもいを抱き、自ら「もの・こと・ひと」に働きかける中で、想像力を発揮し、その子ならではの造形的な視点を働かせて表現活動を楽しむ。その過程では、即興的・創発的な表現が生まれ、情意を露わにしたり、思考をめぐらせたりしながら、表現に対する自分なりの意味や価値をつくり出していく。このプロセスはその子ならではのものであり、その子が構築したプロセスである。子どもは、そのプロセスをくり返す中で造形的な視点を磨き、自分なりの知識や技能、表現の意味や価値を創造していき自身を色濃くしていく。(図1)つまり、図画工作科において表現する過程では、造形的な視点を磨くというその子の感性に影響を及ぼす。それは、その子の生き方にまでも影響する学びをしているともいえる。したがって、それはその子の「人間性の涵養につながる経験」である

と考え、図画工作科部の考える「人間性の涵養につながる経験」を次のように整理した。

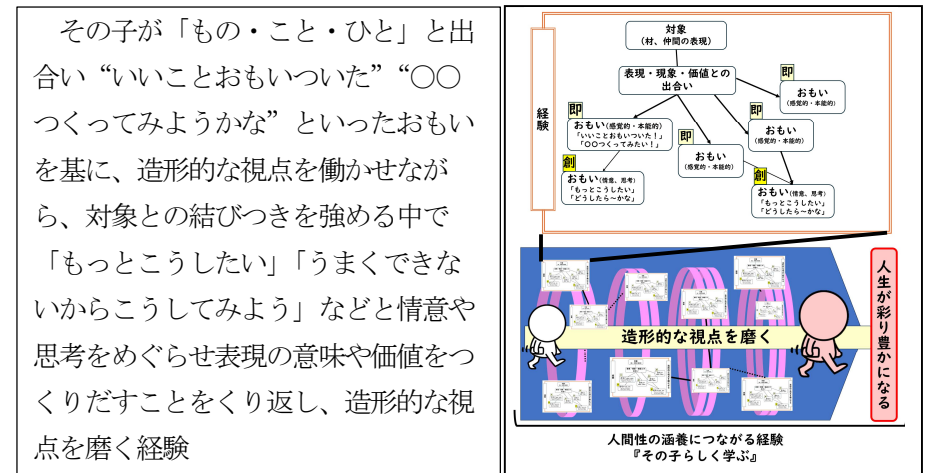


図1 図画工作科における「人間性の涵養につながる経験」と『その子らしく学ぶ』

故に、図画工作科における『その子らしく学ぶ』とは「人間性の涵養につながる経験」をつなげていくことで、造形的な視点を磨き「もの」や「こと」に対する見え方を広げ、世界に魅力的な「もの」「こと」や価値ある「もの」「こと」を増やし、人生を彩り豊かにしていく様である。